

〈研究資料〉

スポーツ系大学生を対象とした学習動機づけ尺度の開発

林 貴裕*・黄田 常嘉**・村山 憲男***,****

Development of an assessment scale for learning motivations for university students in a sports department

Takahiro HAYASHI*, Tsuneyoshi OTA** and Norio MURAYAMA***,****

Abstract

Introduction: Most assessment scales for learning motivations were developed based on existing frameworks of motivation, thus they hardly reflect those of university students who belong to a sports department. In this study, we developed an assessment scale for learning motivations among university students in a sports department and examined the characteristics thereof.

Methods: In the first term of academic year 2020, we conducted a preliminary survey among students in a health and sports science department in order to extract survey items regarding learning motivations. As a result, 90 items related to learning motivations were identified. In the first term of academic year 2021, a survey including these 90 items was conducted among 829 students in this same department. Factors regarding learning motivations were extracted by factor analysis. In addition, based on these results, we developed an assessment scale for learning motivations among university students in a sports department.

Results: Based on factor analysis, three factors, each comprising several subfactors, were identified: “positive sense of purpose”, “learning scenes”, and “evaluation”. Based on these results, an assessment scale was developed.

Conclusion: An assessment scale for learning motivations of university students in a sports department was developed.

Key words: learning motivation, measure, university students in a sports department

I. 初めに

スポーツ庁の調査¹⁹⁾によると、「大学スポーツが抱える課題」として519校中272校の大学が「学業との充実」を回答している。また、スポーツ系大学の大学生は部活動と学習の両立に対して不安を抱いていることも報告⁷⁾されており、スポーツ系大学生に対する適切な学習指導は重要な課題である。

学習動機づけは「ある目標の達成に向かって、学習行動や学習と関わるさまざまな心(認知・感情など)の働きを開始し、方向づけ、維持させる一連のプロセス」¹⁰⁾と定義されており、知識や技能の獲

* 日建総業株式会社

NIKKEN SOGYO CO., LTD.

** 順天堂大学スポーツ健康科学部

Juntendo university, Faculty of health and sports science

*** 昭和女子大学人間社会学部

Showa Women's University, Faculty of Humanities and Social Sciences

**** 順天堂大学女性スポーツ研究センター

Juntendo University, Japanese Center for Research on Women in Sport

責任著者: 村山憲男

E-mail: n-murayama@swu.ac.jp

得, 思考や表現といった活動の基盤として, 重要性について様々な報告がなされている. 一般的な大学生を対象にした研究⁸⁾では, 学習動機づけ向上につながる取り組みと授業は, 多くの学生の学習意欲にポジティブに影響し, キャリア形成にもつながることが報告されている. また, 動機づけの種類については, これまで外発的動機づけと内発的動機づけという2因子から捉えることが一般的であった. しかし, 市川ら⁵⁾は, 従来の方法では学習者が持つ学習動機づけを捉えきれていないとし, 高校生を対象に学習動機づけについて自由回答を求め, KJ法によって回答を分類した結果, 学習動機づけは「充実志向」「訓練志向」「実用志向」「関係志向」「自尊志向」「報酬志向」という6因子に分類できることが示唆された. 一方, 大学生を対象に, 英語学習に関する動機づけについて検討した研究⁹⁾では, 因子分析の結果, 「充実・訓練志向」「自尊・報酬志向」という2因子に分類された. さらに, 大学生の柔道競技者を対象に動機づけの多様性を検討した研究¹⁶⁾では, KJ法の結果, 大きく7つの因子に分類され, 各因子を構成する下位因子も柔道競技者に特徴的な内容で構成されていることが示唆されている.

A大学B学部(以下, 当学部)は, スポーツや健康について科学的にアプローチすることを目的とした学部であるとともに, 中学校教諭一種免許状(保健体育)や高等学校教諭一種免許状(保健体育)をはじめ様々な免許や資格を取得することができる. また, 卒業後の進路は, 教員, 公務員, 企業, 医療・福祉, プロ・実業団, 大学院への進学など多様である. これまでの学習動機づけ研究は, 心理学を学ぶ大学生を中心に, 看護学¹⁾⁶⁾, 保育学¹⁴⁾, 理学療法¹²⁾¹³⁾などの分野を学ぶ大学生を対象にした報告が多いが, スポーツ系大学生を対象にした学習動機づけの研究はあまり報告されていない. 多田ら(2019)²⁰⁾は, この論文のなかでアスリートの大学生は学習に対する意欲や考え方が他の分野の学生とは異なる可能性を指摘していることから, 当学部の学生の学習動機づけは, これまでに報告されてきた研究とは異なる多様性を持つ可能性があると考え

られる. そのため, 当学部の学生用に項目を抽出し, 当学部用の尺度を作成する必要がある.

II. 目的

本研究では, 予備調査と本調査に分けて, 2つの調査を行った. 予備調査では, 学習動機づけに関して, スポーツ系大学生自身の言葉による項目を抽出することを目的に, 当学部の学生を対象にした質問紙調査を行った. 本調査では, 当学部の大学生を対象にした質問紙調査を行い, 抽出された項目をもとにしたスポーツ系大学生が対象の学習動機づけ尺度の作成を試みた. また, 学習動機づけに基づいて対象者を分類し, それぞれの特徴を検討した.

III. 予備調査

スポーツ系大学生における学習動機づけに関する項目を抽出することを目的として, 2020年度前期に予備調査を行った.

対象者は, スポーツ系A大学に所属する大学生185名であった. このうち, 性別は男性が122名, 女性が63名であり, 学年は1年1名, 2年59名, 3年68名, 4年57名であった. Googleフォームを用いて, 質問項目と学習動機づけの自由記述回答を求めた. 学習動機づけに関する教示は, 市川(2001)⁵⁾や佐々木ら(2020)の研究¹⁶⁾に基づいて, 「小学校から現在まで, どのような動機づけ(モチベーション)で学習してきましたか? 思いつくものをできるだけ多く挙げて下さい. 目標は20個以上としますが, 20個挙げられない場合は, それよりも少ない数でも大丈夫です. くだらないと思われるような細かい内容でも結構ですし, 一時期だけに限定した内容でも結構です.」とした.

その結果, 2416項目の自由記述回答が得られた. このうち, 全く同じ回答や, たとえば「将来活用するため」「将来に活かしたいから」などの同じ意味を示す回答を1つの項目にまとめ, 90項目の小項目に整理した. この整理は, 当学部所属する2名の大学生が主に行い, 5名の大学生や大学院生, および, 指導教員が確認を行った.

IV. 本 調 査

1. 本調査の目的

本調査では、予備調査で得られた90項目をもとに、スポーツ系大学生を対象とした学習動機づけ尺度を作成することと、学習動機づけに基づいて対象者を分類することを目的として、質問紙調査を行った。

2. 方法

スポーツ系 A 大学の大学生を対象に、2021年度前期に、大学の講義時間や部活動などを利用して Web による質問紙調査への協力を依頼した。調査は、QR コードまたは URL を用いてアンケートページを提示し、Google フォームを用いて無記名の web アンケートに回答を求めた。

調査項目は、個人属性（年齢、学年、性別など）のほか、学習動機づけ（予備調査で抽出した90項目）について、それが当学部で学ぶ動機づけとしてのどの程度重要であるか、先行研究を参考に「1. 全く重要ではない」「2. 重要ではない」「3. あまり重要ではない」「4. どちらでもない」「5. まあまあ重要である」「6. 重要である」「7. とても重要である」の7件法で回答を求めた。

得られた結果は、予備調査で得た90項目に対して因子構造を把握するために探索的な因子分析（Promax 回転）を行い、この結果をもとに質問紙作成のための項目を抽出し、再度、因子分析（Promax 回転）を行った。各因子の内的整合性は、Cronbach の α 係数に基づいて行った。また、算出した標準化得点をもとに、調査対象者をいくつかのパターンに分けるためにクラスター分析（Ward 法）を行った。また、各群の特徴を検討するため、分散分析や χ^2 検定を行った。

これらの分析では統計解析ソフトとして IBM SPSS Statistics 22 を使用した。

本研究は、順天堂大学スポーツ健康科学研究科研究等倫理委員会の承認を得て実施した（倫理審査番号：2021-45）。

3. 結果

1) スポーツ系大学生の学習動機づけの因子構造の検討、および、尺度の開発

829名（男性465名、女性364名；1年411名、2年226名、3年155名、4年37名；平均年齢19.05±1.07）から回答が得られた。動機づけの因子構造を検討するため、90項目に対して先行資料を参考に主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、スクリープロットによる固有値を参考に、3因子を抽出した。しかし、この3因子にはそれぞれに多様な項目が含まれており、各因子内に下位因子が存在する可能性が示唆された。そこで、因子負荷量が0.4以上であった項目に限定し、各因子内の項目において主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。Promax 回転後の因子パターンと因子間相関を表1から表3に示した。

第1因子(表1)には、応援してくれる人のため、仲間が増えるからなどの項目からなる「ポジティブな人間関係」、知的好奇心のため、多くの価値観に

表1 第1因子「ポジティブな目的意識に関する因子」

項目	I	II	III	IV
第1因子：ポジティブな人間関係 $\alpha=.73$				
応援してくれる人のため	.84	-.11	-.07	.00
仲間が増えるから	.64	.05	.09	-.07
人のためになりたいから	.54	.19	.01	.03
第2因子：知的好奇心 $\alpha=.69$				
知的好奇心のため	-.07	.76	.01	-.04
多くの価値観に触れるため	.05	.64	-.04	-.03
新しいことを覚えると楽しいから	.01	.56	.05	.10
第3因子：能力向上 $\alpha=.77$				
頭良くなりいたいから	.01	-.07	.93	-.06
賢くなりいたいから	-.07	.16	.64	-.01
成績を上げたいから	.23	-.07	.44	.20
第4因子：キャリア $\alpha=.70$				
学位や免許、資格などを得るため	-.06	-.07	-.03	.88
希望進路に進むため	.05	.11	-.01	.61
因子相関	I	.54	.71	.57
	II		.57	.44
	III			.54
	IV			

表2 第2因子「学習場面に関する因子」

	I	II
第1因子：学習場面での人間関係 $\alpha=.68$		
教えてくれる先生のため	.72	-.01
先生を観察するのが楽しいから	.67	.03
家族に勉強を教えてくれる人がいるから	.52	.04
第2因子：ノート $\alpha=.83$		
ノートなど文字を書くのが楽しいから	.00	.84
ノートが埋まっていくのが楽しいから	.02	.83
因子相関	I	.62
	II	

表3 第3因子「評価に関する因子」

	I	II	III
第1因子：自尊感情 $\alpha=.81$			
人より優れていたいから	.85	.03	-.12
勉強が出来たらカッコいいから	.76	-.01	.03
友達からよく見られたいから	.67	-.01	.18
第2因子：低成績の回避 $\alpha=.64$			
単位を落とすたくないから	.05	.71	-.11
補習・補講などを受けたくないから	-.04	.69	.14
第3因子：罰の回避 $\alpha=.70$			
先生や親に怒られたくないから	.00	.03	.75
勉強できれば怒られることが少ないから	.00	-.04	.73
因子相関	I	.43	.54
	II		.36
	III		

触れるためなどの項目からなる「知的好奇心」、頭良くなりたいため、賢くなりたいためなどの項目からなる「能力向上」、学位や免許、資格などをえるため、希望進路に進むためからなる「キャリア」という4つの下位因子が含まれており、第1因子を「ポジティブな目的意識に関する因子」と命名した。

第2因子(表2)には、教えてくれる先生のため、先生を観察するのが楽しいからなどの項目からなる「学習場面での人間関係」、ノートなど文字を書くの

が楽しいから、ノートが埋まっていくのが楽しいからという項目からなる「ノート」という2つの下位因子が含まれており、第2因子を「学習場面に関する因子」と命名した。

第3因子(表3)には、人より優れていたいから、勉強が出来たらカッコいいからなどの項目からなる「自尊感情」、単位を落とすたくないから、補習・補講などを受けたくないからという項目からなる「低成績の回避」、先生や親に怒られたくないから、勉強できれば怒られることが少ないからという項目からなる「罰の回避」という3つの下位因子が含まれており、第3因子を「評価に関する因子」と命名した。

この結果をもとに、スポーツ系大学生を対象とした学習動機づけ尺度を開発した。この尺度は、表1から表3に示した各下位因子によって構成されている。各下位尺度の α 係数を算出したところ、ポジティブな人間関係は0.73、知的的好奇心は0.69、能力向上は0.77、キャリアは0.70、学習場面での人間関係は0.68、ノートは0.83、自尊感情は0.82、低成績の回避は0.64、罰の回避は0.70であった。また、すべての項目における α 係数は0.88であった。

各質問項目は、前述した通り「1. 全く重要ではない」から「7. とても重要である」までの7件法で回答を求めたため、各下位因子の得点は、3項目の場合は最小値が3、最大値が21、2項目の場合は最小値が2、最大値が14となる。また、各下位因子の得点の分布には偏りがあり、正規分布を示していなかった。そこで、Stanineに基づいて、各下位因子の得点が正規分布になるように、それぞれの得点を1から9の値に割り当てた。具体的には、全対象者のうち最も低い値であった4%が1、次に低い値であった7%が2、次に低い値であった12%が3、次に低い値であった17%が4、中央値前後の値を示した20%が5と割り当てられ、6から9も、17%、12%、7%、4%がそれぞれに割り当てられた(付録)。

この、表1から表3に示した項目や因子からなる7件法の尺度と、得点の換算表を、「スポーツ系

大学生を対象とした学習動機づけ尺度」と命名した（付録）。

2) スポーツ系大学生の学習動機づけによる分類

スポーツ系大学生の学習動機づけの特徴を分類するため、本研究の対象者をもとに Ward 法によるクラスター分析を行った。その結果、対象者は4つの群に分類され、各群の各下位因子の平均得点や標準偏差を表4に示した。4群を独立変数、各下位因子の得点を従属変数とした分散分析を行った結果、全ての下位因子において有意な差が示された（ポジティブな人間関係：F(2.20)=194.08, p<.01, 知的好奇心：F(2.20)=52.27, p<.01, 能力向上：F(2.20)=176.06, p<.01, キャリア：F(2.20)=37.30, p<.01, 学習場面での人間関係：F(2.20)=181.02, p<.01, ノート：F(2.20)=254.71, p<.01, 自尊感情：F(2.20)=156.89, p<.01, 低成績の回避：F(2.20)=37.63, p<.01, 罰の回避：F(2.20)=176.00, p<.01)。

第1群は、「低成績の回避」と「罰の回避」を除いた全ての下位因子において、他群と比較して最も高い得点を示したことから、学習に対して高い動機づけを有している傾向にあると考えられ、「高群」と命名した（n=313）。第2群は全ての因子において中程度の得点を示していたことから、学習に対して中程度の動機づけを有していると考えられ、「中群」と命名した（n=233）。第3群は多くの下位項目で中群と同等の得点を示しているが、「低成績の回避」と「罰の回避」といったネガティブな事項を回避する下位因子では、4群中、最も高い得点を示したことから、「ネガティブ回避群」と命名した（n=221）。第4群は、「知的好奇心」の下位因子で僅かにネガティブ回避群よりも高い得点を示したものの、他の下位因子では全体的に得点が最も低かったことから「低群」と命名した（n=62）。

4群における学年の偏りを検討するためχ²検定を行った（表5）。その結果、有意な偏りが得られ

表4 クラスター分析（Ward法）による4群のそれぞれの特徴

		クラスターⅠ	クラスターⅡ	クラスターⅢ	クラスターⅣ	F値	多重比較		
		n=313	n=233	n=221	n=62				
ポジティブな人間関係	平均	6.58	5.11	4.56	2.15	194.078*	Ⅳ<Ⅰ*	Ⅳ<Ⅱ*	Ⅳ<Ⅲ*
	標準偏差	1.43	1.77	1.22	1.24		Ⅲ<Ⅰ*	Ⅲ<Ⅱ*	Ⅱ<Ⅰ*
知的好奇心	平均	6.03	5.45	4.17	4.29	52.273*	Ⅳ<Ⅰ*	Ⅳ<Ⅱ*	
	標準偏差	1.72	1.90	1.54	2.67		Ⅲ<Ⅰ*	Ⅲ<Ⅱ*	Ⅱ<Ⅰ*
能力向上	平均	6.67	4.85	4.48	2.39	176.063*	Ⅳ<Ⅰ*	Ⅳ<Ⅱ*	Ⅳ<Ⅲ*
	標準偏差	1.47	1.87	1.38	1.49		Ⅲ<Ⅰ*	Ⅱ<Ⅰ*	
キャリア	平均	7.04	6.19	4.93	4.66	37.296*	Ⅳ<Ⅰ*	Ⅳ<Ⅱ*	
	標準偏差	2.37	2.62	2.51	2.88		Ⅲ<Ⅰ*	Ⅱ<Ⅰ*	Ⅱ<Ⅲ*
学習場面での人間関係	平均	6.33	4.01	5.52	2.34	181.02*	Ⅳ<Ⅰ*	Ⅳ<Ⅱ*	Ⅳ<Ⅲ*
	標準偏差	1.65	1.51	1.38	1.38		Ⅲ<Ⅰ*	Ⅲ<Ⅱ*	Ⅱ<Ⅰ*
ノート	平均	6.60	3.52	5.17	1.47	254.714*	Ⅳ<Ⅰ*	Ⅳ<Ⅱ*	Ⅳ<Ⅲ*
	標準偏差	1.57	1.77	1.76	1.11		Ⅲ<Ⅰ*	Ⅱ<Ⅰ*	Ⅱ<Ⅲ*
自尊感情	平均	6.58	4.55	5.10	2.21	156.889*	Ⅳ<Ⅰ*	Ⅳ<Ⅱ*	Ⅳ<Ⅲ*
	標準偏差	1.56	1.85	1.54	1.24		Ⅲ<Ⅰ*	Ⅱ<Ⅰ*	Ⅱ<Ⅲ*
低成績の回避	平均	5.98	4.58	6.17	4.13	37.627*	Ⅳ<Ⅰ*	Ⅳ<Ⅲ*	
	標準偏差	2.03	2.04	2.04	2.52		Ⅱ<Ⅰ*	Ⅱ<Ⅲ*	
罰の回避	平均	5.72	3.54	6.54	2.40	176.002*	Ⅳ<Ⅰ*	Ⅳ<Ⅱ*	Ⅳ<Ⅲ*
	標準偏差	1.86	1.75	1.48	1.95		Ⅱ<Ⅰ*	Ⅱ<Ⅲ*	Ⅰ<Ⅲ*

*P<.05

表5 クラスターと学年間の χ^2 検定

		クラスター				合計
		高群 (n=313)	中群 (n=233)	ネガティブ回避群 (n=221)	低群 (n=62)	
1年生	n	185	119	81	26	411
	%	45.0%	29.0%	19.7%	6.3%	100.0%
2年生	n	78	58	70	20	226
	%	34.5%	25.7%	31.0%	8.8%	100.0%
3年生	n	38	44	59	14	155
	%	24.5%	28.4%	38.1%	9.0%	100.0%
4年生	n	12	12	11	2	37
	%	32.4%	32.4%	29.7%	5.4%	100.0%

($p < .05$), 特に, 高群は1年生が最も多く, 一方で, ネガティブ回避群と低群は3年生が最も多かった. また, 各群と性別の偏りを検討した結果, 有意差が見られなかった.

V. 考 察

本研究では, まず, 当学部に所属する学生を対象に, スポーツ系大学生を対象とした学習動機づけ尺度を開発した. その結果, スポーツ系大学生の学習動機づけ因子として, 「ポジティブな目的意識に関する因子」, 「学習場面に関する因子」, 「評価に関する因子」の3因子が抽出された. さらに, 「ポジティブな目的意識に関する因子」には「ポジティブな人間関係」, 「知的好奇心」, 「能力向上」, 「キャリア」の4因子, 「学習場面に関する因子」には「学習場面での人間関係」, 「ノート」の2因子, 「評価に関する因子」には「自尊感情」, 「低成績の回避」, 「罰の回避」の3因子が, 下位因子としてそれぞれ抽出された.

第1因子の「ポジティブな目的意識に関する因子」のうち「ポジティブな人間関係」「知的好奇心」に関しては, 先行研究における内発的動機づけに関係する因子⁵⁾¹⁵⁾¹⁶⁾²¹⁾や人間関係に関係する因子⁴⁾²¹⁾が抽出されており, 共通した結果であると考えられる. 特に「ポジティブな人間関係」を構成している項目に注目すると, 佐々木ら(2020)の柔道の動機づけの研究¹⁶⁾における「人との関わり」, 「恩返

し」という因子に類似していることから, 競技と学習動機づけには関連性があるかもしれない. 「能力向上」についても多くの先行研究において同様な内容の因子が抽出されている^{3)~5)11)16)18)21)}. 特に畑野(2013)³⁾は, 「向上志向」が全般的な学習行動を促進することを報告しており, 学習動機づけにおける重要な因子であると考えられる. 「キャリア」については大熊(2020)の保育学生を対象にした研究の学習継続動機づけにおいて「資格職業志向」という類似した内容の因子が抽出されている¹⁴⁾. この因子は保育学生の特徴的な結果であると考えられているが, 教員免許をはじめ様々な資格が取得可能なスポーツ系大学生においても同様の結果が得られた.

第2因子の「学習場面に関する因子」については, これまでの先行研究では, 学習場面の項目を中心に構成された動機づけ因子は報告されておらず, 本研究の特徴的な結果であった. 本研究では, スポーツ系大学の自由回答から得られた結果をもとにボトムアップ的に調査項目を作成したことも, このような特徴的な結果が得られた一因であると考えられる. 山根ら(2017)²²⁾は, ノートを記載する有効性を認知していることが学習動機づけにつながると報告しており, この因子に含まれる「ノート」は学習動機づけを考える上で重要な可能性がある. しかし, 学習動機づけに対するこれらの具体的な内容や意義については, 今後の研究課題である.

第3因子の「評価に関する因子」は、外発的動機づけに関連した因子と類似しており、先行研究⁴⁾⁵⁾⁹⁾¹¹⁾¹⁴⁾²¹⁾と同じ傾向が見られた。下位因子である「自尊感情」は、学習の2要因モデル⁵⁾においても「自尊志向」という因子が抽出されており、当因子を構成する項目と類似していた。また、「低成績の回避」「罰の回避」については、関谷(2018)¹⁸⁾は「消極的義務感」という因子を挙げているほか、遠藤ら(2020)²⁾が報告した大学生を対象にしたインタビュー調査の結果では、「勉強するのは補習を避けるため」という内容も含まれており、本研究と共通していた。特にスポーツ系大学生では、補習・補講が行われることで部活動への参加時間が制限されることなども影響していると考えられる。しかし、特に「低成績の回避」「罰の回避」については他の下位因子よりも報告が少なく、これらの具体的な内容や意義についても、今後の研究課題である。

本研究では、これらの結果をもとに3因子と合計9つの下位因子からなる7件法の尺度と、標準化得点を算出するための換算表を作成し、「スポーツ系大学生を対象とした学習動機づけ尺度」(付録)を作成した。信頼性係数に関しては、全体的に0.7~0.8前後の α 係数が示された。

対象者をクラスター分析によって分類した結果、「高群」「中群」「ネガティブ回避群」「低群」の4群に分類された。各群の人数は「高群」が最も多く、「低群」が最も少なかったことから、スポーツ系大学生の多くが学習に対してそれなりに高い動機づけを持っている可能性が示された。また、学年の偏りについては、高群は1年生が最も多く、ネガティブ回避群と低群は3年生が最も多かった。このことから、1年生が高い学習動機づけを持ち、学年が上がった3年生では低い学習動機づけを持つ傾向を持つことが示された。ただし、4年生は3年生よりも、高群が多く、低群が少なかった。これは最終学年で就職や進学のとおり高い学習動機づけを持つようになることが要因として考えられる。この結果は、佐藤(2011)による看護系大学生を対象にした研究¹⁷⁾において示された、自律的動機づけ

が1年生で一番高く、進級に伴い低下し、最終学年で再び上昇するという結果とも矛盾しない。しかし、学年による動機づけの変化には、様々な要因が関係していると考えられるため、これらの直接的な検討は今後の課題である。

最後に、本研究にはこのほかにもいくつかの課題がある。まず、本研究はスポーツ系A大学の学生のみを対象としたが、今後は、他のスポーツ系大学も含めて検討する必要がある。本研究では大学での学習について講義系の科目や実習系の科目などを分けて検討しなかったため、その違いについても今後検討する必要がある。また、本研究は予備調査の段階から、COVID-19が世界的に流行している状況での調査であった。そのため、COVID-19が終息した後の、いわゆるアフターコロナにおいて本研究結果の妥当性について検討する必要がある。さらに、今後は、本研究で作成した尺度を実際の教育や学生指導に活用し、項目の構成や因子名、妥当性を含め、有用性や改善点などを引き続き検討していく必要がある。

VI. 結 論

スポーツ系大学生の学習動機づけ因子として、「ポジティブな目的意識に関する因子」、「学習場面に関する因子」、「評価に関する因子」の3因子が抽出された。さらに、「ポジティブな目的意識に関する因子」には「ポジティブな人間関係」、「知的好奇心」、「能力向上」、「キャリア」の4因子、「学習場面に関する因子」には「学習場面での人間関係」、「ノート」の2因子、「評価に関する因子」には「自尊感情」、「低成績の回避」、「罰の回避」の3因子が、下位因子としてそれぞれ抽出された。

この3因子と合計9つの下位因子からなる7件法の尺度と、標準化得点を算出するための換算表からなる、「スポーツ系大学生を対象とした学習動機づけ尺度」(付録)を作成した。対象者をクラスター分析によって分類した結果、「高群」「中群」「ネガティブ回避群」「低群」の4群に分類された。

付録 スポーツ系大学生を対象とした学習動機づけ尺度

<教示>

(1)～(23)の内容は、あなたの学習動機づけ（モチベーション）として、どの程度重要ですか？次の選択肢のうち最も当てはまるもの1つを、それぞれ選択して下さい。

<選択肢>

1. 全く重要ではない
2. 重要ではない
3. あまり重要ではない
4. どちらでもない
5. まあまあ重要である
6. 重要である
7. とても重要である

<質問項目>

- (1) 応援してくれる人のため
- (2) 知的好奇心のため
- (3) 頭良くなりたいため
- (4) 学位や免許、資格などを得るため
- (5) 教えてくれる先生のため
- (6) ノートなど文字を書くのが楽しいから
- (7) 人より優れていたいから
- (8) 単位を落としたいくないから
- (9) 先生や親に怒られたくないから
- (10) 仲間が増えるから
- (11) 多くの価値観に触れるため
- (12) 賢くなりたいため
- (13) 希望進路に進むため
- (14) 先生を観察するのが楽しいから
- (15) ノートが埋まっていくのが楽しいから
- (16) 勉強が出来たらカッコいいから
- (17) 補習・補講などを受けたくないから
- (18) 勉強できれば怒られることが少ないから
- (19) 人のためになりたいから
- (20) 新しいことを覚えると楽しいから
- (21) 成績を上げたいから
- (22) 家族に勉強を教えてくれる人がいるから
- (23) 友達からよく見られたいから

<採点方法>

各因子について次の項目の合計点を算出した上で、各因子の換算表に基づいて評価点に変換して下さい。この評価点が各因子の最終的な得点になります。

ポジティブな人間関係：(1), (10), (19)

知的好奇心：(2), (11), (20)

能力向上：(3), (12), (21)

キャリア：(4), (13)

学習場面での人間関係：(5), (14), (22)

ノート：(6), (15)

自尊感情：(7), (16), (23)

低成績の回避：(8), (17)

罰の回避：(9), (18)

<換算表>

評価点	ポジティブな人間関係	知的好奇心	能力向上	キャリア	学習場面での人間関係	ノート	自尊感情	低成績の回避	罰の回避
9	21	21	21	14	16以上	13～14	20～21	14	12以上
8	20	20	20	-	14～15	11～12	18～19	13	10～11
7	18～19	18～19	18～19	13	12～13	9～10	16～17	12	9
6	16～17	17	16～17	-	10～11	7～8	14～15	11	7～8
5	14～15	15～16	15	12	8～9	6	12～13	10	6
4	12～13	14	13～14	11	6～7	4～5	10～11	8～9	4～5
3	10～11	12～13	11～12	10	4～5	3	7～9	6～7	3
2	8～9	10～11	8～10	8～9	-	-	4～6	4～5	-
1	7以下	9以下	7以下	7以下	3	2	3	2～3	2

利益相反

本研究に関して、開示すべき利益相反はない。

謝辞

投稿に当たり、順天堂大学スポーツ健康科学部および順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科の長登健先生、長岡知先生から、大変に有意義なご助言を頂きました。誠にありがとうございました。また、本研究は、順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科における林貴裕の修士論文(2021年度)に基づいたものです。

文 献

- 1) 遠藤恭子, 板倉朋世, 河野かおり, 関根龍子(2018) 基礎看護技術演習における看護学生の学習動機づけの推移—看護学生用学習動機づけ尺度を使用して—。獨協医科大学看護学部紀要, 11, 1-11.
- 2) 遠藤野ゆり, 酒井 理(2020) キャリア教育成果と学力向上の関係に主体性と自己期待感が与える影響: 進路多様校の教育実践に即した質的検討。生涯学習とキャリアデザイン=Lifelong Learning and Career Studies, 17(2), 103-117.
- 3) 畑野 快(2013) 大学生の自律的な学習動機づけの検討: 学習・キャリアの変数との関わりから。青年心理学研究, 24(2), 137-148.
- 4) 平山祐一郎, 平山祥子(2001) 大学生における学習動機の2要因モデルの検討。東京家政大学研究紀要 1 人文社会科学, 41, 101-105.
- 5) 市川伸一(2001) 学ぶ意欲の心理学。東京, PHP 研究所。
- 6) 鎌田美千代(2021) 看護学生の学習動機づけに関する文献レビュー。東北福祉大学研究紀要, 45, 143-160.
- 7) 清宮孝文, 依田充代, 門屋貴久(2015) 体育系大学生の大学生活不安に関する研究。日本体育大学紀要, 45(1), 27-37.
- 8) 小山知子(2015) 動機づけと自己効力感の変化が大学生の学習意欲に与える影響。多摩大学グローバルスタディーズ学部紀要, 7, 63-74.
- 9) 久保信子(1997) 大学生の英語学習動機尺度の作成とその検討。教育心理学研究, 45(4), 449-455.
- 10) 黒田祐二(2007) 動機づけ 堀 洋道(監修) 櫻井茂男・松井 豊(編) 心理測定尺度集Ⅳ子どもの発達を支える: 対人関係・適応。東京, サイエンス社。
- 11) 宮本孝子(2020) 学習動機の2要因モデルからみた教職課程学生の動機づけ: 志向性の特徴と成績との関連。城西大学教職課程センター紀要=Josai Teacher-Training Course Center review(4), 47-51.
- 12) 水池千尋, 大城昌平, 重森健太, 西田裕介, 大町かおり, 吉川卓司(2006) 本学理学療法専攻1年次生の学習動機と職業意識。リハビリテーション科学ジャーナル, 1, 83-90.
- 13) 成田亜希, 宮本友弘(2021) 理学療法士国家試験対策における学習動機づけの調整スタイルの類型化とその特徴。保健医療学雑誌, 12(1), 52-61.
- 14) 大熊美佳子(2020) 保育学生の学習継続動機づけに関する研究。秋草学園短期大学紀要(36), 51-63.
- 15) 大熊美佳子(2021) 保育学生の学習継続動機づけと友人関係への動機づけに関する研究。秋草学園短期大学紀要(37), 39-50.
- 16) 佐々木康允, 村山憲男, 森腰 歩, 竹澤稔裕, 廣瀬伸良(2020) 大学生柔道競技者における柔道実践の動機づけの多様性。武道学研究, 53(1), 11-20.
- 17) 佐藤美佳(2011) 看護学生の仮想的有能感と自律性欲求・学習動機づけとの関連。八戸短期大学研究紀要, 34, 87-109.
- 18) 関谷弘毅, 大橋由紀子, 片桐徳昭(2018) 動物看護学生の英語学習動機尺度の開発。中国地区英語教育学会研究紀要, 48, 43-52.
- 19) スポーツ庁(2018) 「平成30年大学スポーツの振興に関するアンケート調査結果概要~大学~」。
- 20) 多田泰紘, 岩崎千晶, 中澤 務(2019) 学生アスリートに対するライティング学習支援の効果検証: 学習特性に基づく支援方法の検討。関西大学高等教育研究, 10, 183-189.
- 21) 友納艶花(2019) 学習動機づけの類型化と職業観に関する実証的研究。九州女子大学紀要, 55(2), 71-84.
- 22) 山根嵩史, 魚崎祐子, 田中 光, 中條和光(2017) ノートテイキング方略の使用と有効性認知・コスト感の関係。日本心理学会大会発表論文集, 81, 3A-091-093A-091.

(令和4年2月10日 受付)
(令和4年7月12日 受理)